

障害者スポーツの発展のために ～車椅子バスケットボールを例に～



車椅子バスケットボール男子日本代表
ヘッドコーチ 及川 晋平

特定非営利活動法人 Jキャンブ
事務局長 金子 恵美子



目次

1. 自己紹介

2. Jキャンプを通して

3. 課題

4. 大学における普及と育成

～ 海外での取り組みを通して ～

自己紹介

及川晋平

16歳の時に骨肉腫になり右足を切断（ローテーション）。持ち点は4.5。
1993年から4年間アメリカに留学しながら、車椅子バスケットをする。（全米選手権準優勝）
2000年にシドニーパラリンピック、2002年世界選手権（北九州）に選手として出場。
コーチとしては、2012年ロンドンパラリンピックにアシスタントコーチとして、
現在はリオデジャネイロパラリンピックに向けた日本代表男子のヘッドコーチを務める。
現在NO EXCUSE（東京）所属でコーチ兼選手。NPO法人 Jキャンプ理事長。PwC Japanに勤務。

金子恵美子

東京都障害者スポーツ協会、日本障害者スポーツ協会勤務。シドニー、トリノパラ等に帯同。
NPO法人Jキャンプ事務局長
日本パラリンピアンズ協会アドバイザー
日本車椅子バスケットボール連盟強化指導部渉外チームサポーター。
スコットランドの大学院に留学、非営利組織のマネジメントを学ぶ。

2. Jキャンプを通して (2001-2013)



Jキャンプの目的・狙い

①「車椅子バスケットの楽しさ」を伝えたい！

- ➔ 「楽しさ」をどうやって伝えていくか？の追求。
「一生懸命頑張ること」「学ぶこと」「チームワーク」「楽しむこと」

②障害の有無を問わず、若い世代を中心に

③障害のある人の可能性を追求する場（可能性と選択肢）

- ➔ 「できる！」を体感。仲間。新しい挑戦や発見の場。

④広く市民に障害者に対する理解を深める機会

- ➔ 体育施設、宿泊施設、メディア、移動、地域（市町村）、スポンサー

⑤多くの人とスポーツの楽しさを分かちあうこと

- ➔ スタッフ（医療・栄養・技術・移動・広報・マネジメント）、スポンサー

Jキャンプの事業

- ①ベーシックキャンプの開催
- ②ミニキャンプの開催
- ③Jキャンプビギナーの開催
- ④Jキャンプfor コーチの開催
- ⑤海外研修派遣（イリノイ大学など）
- ⑥情報発信（国内外で取材し、HP、FB、メルマガ）
- ⑦通訳の派遣

3. 課題

活動を通して見えてきた課題

3. 課題

① 障害者アスリートのキャリア形成の課題

- ➔ アスリートになるためのキャリア形成が難しい環境
 - ・ 初心者がどうやって育成されていくのか？の絵が描きにくい
 - ・ 個人の育成・強化がクラブチーム中心になる
 - ・ 競争力が身に付きにくい（同年代・同世代でやる競いあう場）

② 地域における障害者スポーツの環境

- ➔
 - ・ 車椅子バスケットをする場（バリアフリー/人口が少ない/駐車場）
 - ・ 指導者が少ない

4.大学における普及と育成

～海外の取り組み事例から～

4. 大学における普及と育成

イリノイ大学の取り組み

DRES: Disability Resource & Educational Service

- ① 学業のサポート
- ② 生活のサポート (住居など)
- ③ 環境のサポート (バリアフリー、駐車場、移動など)
- ④ 健康のサポート (メンタル・フィジカル・医療)
- ⑤ アスレチックプログラム

車椅子バスケットボールチーム (男女)

車椅子トラック(陸上)



4.イリノイ大学の取り組み

障害のある人にとって

- ・スポーツに専念する場の獲得（キャリア形成➡パラやプロへ）
- ➡ 高校・中学から目指す、レジデンシャルアスリート
- ・学業に専念する場の獲得
- ➡ 将来の就職などのキャリアづくりに繋がる
- ・同世代・仲間/健康（二次障害の防止、保険）

一般の学生にとって

- ・障害者アスリートと関わる場
- ・人間教育の一環（ダイバーシティなど）

大学にとって

- ・ユニークな価値のある取り組み（評価）
- ➡ 奨学金/DRES（開発）
- ・学生の獲得、学生が関わる場の創出
- ・障害者スポーツの研究・発展の場（雇用）



大学所属の車椅子バスケットボールチームがあり、シーズンを通してリーグ戦が行われ、最後に大学選手権が開催されている。NCAAルール

- 1.University of Illinois
- 2.University of Wisconsin-Whitewater
- 3.University of Texas at Arlington
- 4.University of Alabama
- 5.Edinboro University of Pennsylvania
- 6.University of Missouri
- 7.Southwest Minnesota State University

4. 大学における普及と育成



～主にドイツとイギリスの事例から～



大学の車椅子バスケット（各国の状況）



	大学選手権	大学における車椅子バスケットの状況	(参考) 公式リーグへの健常者の参加
アメリカ	いわゆるインカレがある。	<ul style="list-style-type: none">・大学に車椅子バスケットチーム（基本的には障害者のみ）がある。・海外から車椅子バスケットを学びたい学生が多く留学してきている。	認められていない。
ドイツ	大学選手権があったが自然消滅	<ul style="list-style-type: none">・大学のチームは自然消滅・大学が地域の障害者の活動拠点となっている	4.5点で参加 （重度障害の割合が多いことを踏まえ、重度障害者の機会創出を目的として）
イギリス	2014年大学選手権スタート （5校：健常者43名、障害者29名参加）	<ul style="list-style-type: none">・大学のチームができてきた（健常者ミックス）・大学を地域の障害者の活動拠点とすること、また、競技強化拠点とすること、など複合的な戦略を持って取り組みを始めている。	4.5点で参加 （国内リーグの活性化等を目的として）

大学選手権について



	ドイツ	イギリス
大学選手権 開始時期	1985年頃～	2014年～
参加者層	大学生、その地域周辺に住む障害のある人	当該大学に所属する障害のある学生（約4割）、ない学生ミックス（約6割）
特徴	<ul style="list-style-type: none">・大学生の、大学生による大学生のための手作りの大会。・会場はほとんど学校で、エアマットや寝袋を持って教室で寝泊まりするなど和気あいあいとした大会。	<ul style="list-style-type: none">・イギリス車椅子バスケット協会による取組の一つ。・全ての大学において、障害のある学生が仲間たちとスポーツをすることができるようにすること（大学を代表する、という経験の意味、スポーツを競技レベルで行う機会の創出の重要性）を目標に。
現在	健常者がすべての公式戦に出られるようになったことで自然消滅	今年スタート時5校、来年は9校になることが決まっていて、多くの大学からこの取組への問い合わせがある。

障害のある人にとって

- ・大学など学校が地域に開かれていること、拠点となっていることで、地域でスポーツをする環境が手に入れられる。

大学生にとって

- ・実践を重んじるお国柄ゆえ、障害児教育、スポーツ指導などを学ぶ学生にとっては、その実践の対象者がすぐ近くにいることで活きた学びとなる。



➡現在は

- ・「大学」×「地域」の有機的な交流により、老若男女、障害の有無を問わず多くの人々がスポーツを楽しむことのできる環境に。

- ・現在リーグ6部132チームあり（日本は77※）

- ・世界からプロ契約でやってくる選手も。
（日本の香西宏昭は先シーズンHamburgに→）



Worcester大学をはじめとする大学へのアプローチ

- ・イギリス車椅子バスケットボール協会は、Education Development Officer というスタッフを配置、大学等高等教育機関において、車椅子バスケットに関する取り組み（地域のキーステーションとなること、トップアスリートの強化拠点となること等）を仕掛ける。
- ・この大学に行って、学びながら車椅子バスケットをしたい！と思える場づくりをすることで、障害のある子どもたちの大学進学率を増やしたい。
- ・大学が地域に開かれていること、拠点となっていることで、地域でスポーツをする環境が手に入れられる（ドイツ同様）
- ・2012年Worcester大学にSports Coaching Science with Disability Sport というコース設置

➡現在は

- ・Worcester大学は代表チームの強化拠点。
（国際大会も多数誘致）
- ・リーグは4部69チーム（大学のチーム数は9校）
- ・大学内にアカデミー設立も検討中。



課題に対するヒント

① 障害者アスリートのキャリア形成の課題

- ➔ アスリートになるためのキャリア形成が難しい環境
 - ・ 初心者がどうやって育成されていくのか？の絵が描きにくい
 - ・ 個人の育成・強化がクラブチーム中心になる
 - ・ 競争力が身に付きにくい（同年代・同世代でやる競いあう場）
- ➔ （課題解決のヒント）
 - ・ 大学に車椅子バスケットチームがあることで、そこを目指して文武両道で、という構図ができる。
 - ・ また、大学において同年代で競い合うことで競争力を養うことができる。

② 地域における障害者スポーツの環境

- ➔ ・ 車椅子バスケットをする場（バリアフリー/人口が少ない/駐車場）
 - ・ 指導者が少ない
- ➔ （課題解決のヒント）
 - ・ 大学が地域に開かれることで、場と人材の確保が同時に解決できる。

(おまけ) 世界で活躍するJキャンプスタッフ (車椅子バスケット健常者プレイヤー)



伊藤由紀



ドイツ・ケルンスポーツ大学卒業後、スポーツセラピストとしてドイツで働いている。在学中からプレイヤーとしてドイツで長年活躍。現在も1部リーグでプレイヤーを続けている。また、コーチライセンスをとり、自所属の下部リーグチーム等でコーチも務める。



原田麻紀子



アメリカ・イリノイ大学大学院でスポーツマネジメントを専攻中、同大車椅子バスケット部のマネージャー、アシスタントコーチをつとめる。2008年夏に卒業後、現在はカナダ・バンクーバーのBC Wheelchair Basketball Societyにてプログラムコーディネーターとして働く。カナダでプレイヤーとして活動中。

ご清聴ありがとうございました。

**今回ご紹介させていただいた情報をもとに、
この後皆さんとお話しできればと思います。**